

中期計画スローガンを カタチにするために

② たまり場ぱれっと編

「障がい」というものをどのように考えるか、理念にもうたわれている「当たり前の暮らし」とは何かを今もなお追求しながら事業を展開するぱれっと、そのすべての出発点が「たまり場ぱれっと」でした。38年の歴史の中で、ニーズの変化に合わせてその形を変えながら、可能性を拓け続けています。

●たまり場ぱれっとの成り立ち

ぱれっとが誕生した1983年当時、障がいのある人たちの存在は地域社会でもあまり知られていませんでした。障がいがある、ただその一点だけで「働く、遊ぶ、暮らす」という生活圏が制限されてしまい、社会人である彼らは職場と家庭の往復のみ、休日も家族と過ごすことが多く、同年代の友達と気軽に会ったり、遊びに出かけることはほとんどありませんでした。そこで長年、恵比寿社会教育館で開催されてきた行政主導の社会教育の場、「えびす青年教室」に通う障がいのある人たちや、ボランティア、大学教授などの関係者を中心に、様々な議論を経て、地域に気軽に集まれる場所として開いたのが「たまり場ぱれっと」でした。

事業開始当初は、恵比寿西の部屋を借り、水曜日夜、土曜日午後、日曜日全日を「開放日」として、障がいのある人が気軽に立ち寄れるようになっていました。ボランティアはその時間の当番としてシフトを組

2020年1月、ぱれっとの事業のこれからを描く上で重要な「中期計画スローガン」が完成しました。コロナ禍で間が開いてしまいましたが、今回から特集として、各事業がこのスローガンをどのように形にしていくのかについてお伝えします。

んで、障がいのある人たちの話し相手をしたり、料理を一緒に作ったり、喫茶店にコーヒーを飲みに行ったりと、自由に過ごしていました。



【一九八三年開設当時の
たまり場ぱれっと】

●第1の変革期

開設より13年経った1996年頃から、この当番のボランティアが不足し始め、また、遊びに来る障がいのある人たちも数名に固定されるようになってきました。そこで、今一度たまり場ぱれっとの活動を見直すということで、一旦従来の形を閉鎖、不定期に皆で集まって話し合いを持つようになりました。今振り返ってみると、この集まりがその後形を変えて、現在の月1回のたまり場ぱれっと開放日につながっているように思います。その話し合いの中で、開放日のほかにクラブ活動も発足、「空間としてのたまり場」から「プログラムを通して楽しむ」という現在の形への大きな変革となりました。同時に、プログラムを企画運営する上で、専従職員の必要性も議論され、再開した1997年からアルバイトと

いう形ではありましたがスタッフが常駐するようにもなりました。

第1の変革期を経て、ほぼ昨年1月まで実施されてきたたまり場ばれっと活動の原型が出来上がったように思います。

●そして今、抱える課題

月1回の開放日、クラブ活動、障がいのある人たちが自ら運営する「絆ミーティング」と言った活動は、年月を重ねるごとに充実、その内容もユニークなものに進化していきました。参加人数も増え、企画が広がる反面、安全管理もより一層必須事項になり、現地の下見、グループ編成、タイムテーブルなど、企画に関わる運営ボランティアにかかる負担も大きくなりました。特にバス2台、参加者80名という宿泊行事の運営は、本業を持つ社会人にとって「やりがい」と「負担」の両面を感じるものとなっていったと思います。こうした背景の中、数年前より、企画の中心にある運営ボランティアが不足し始め、新しく参加したボランティアや障がい者を「つないでいく」という、たまり場ばれっと本来の役割もなかなか果たせないまま、行事は多いが、運営にあたる人がいないという状態に陥っていったと分析しています。また、余暇活動を運営するたまり場ばれっとは、元来大きな収益を上げる事業とは両極にあり、潤沢に資金が無い状況で専従正職員を雇用し続けることにも限界がありました。しかし、非常勤という雇用形態では、なかなか募集をかけても応募者がおらず、職員もボランティアも慢性的な不足が続きました。

●そしてコロナ禍の今

こうした「たまり場ばれっとの危機」を「よし！いっちょやってやるか！」と腰を上げてくれたのは、昔から活動を支えてきたボランティアたちでした。昨年から何度

も話し合いを重ね、従来の開放日を「たまり場《はなれ》」という形に変えて実施、オンラインでのボランティア会議を開きながら、新しく参加する人を意識的に巻き込み、高校生、大学生を筆頭に再び多くの人たちが集まってくるようになっていきます。手元の統計では、この1年の応募は、

インターネット応募	85名
上記のうちオンライン説明会参加	48名
上記のうち会議、行事等参加	18名

(2020年4月～2021年3月)

となっており、この数字は例年ほどの多さではないものの、コロナ禍の日本にあって、一定以上の方々がボランティアに関心を示していることを表していると思います。この1年の動きを見ていると、そういった方々をつないでいくたまり場ばれっとは、単なる「ボランティアプログラムを行なう団体」ではなくひとつの「コミュニティ」なのだ改めて認識しています。障がいのある人たちのみならず、ボランティアもまたそこを居場所と思える、存在価値を感じ取れる・・・創立当初から受け継がれる思いがそこにあります。

●第2期変革期？

コロナ禍によって、たまり場ばれっとは宿泊行事を含めて半年間すべての活動を自粛しました。・・・ある意味「ゼロ」になったと言えます。見方を変えれば、今まで、ボランティア不足がありながらも次々とプログラムに追われてきた状況をクリアに出来たと言えると思います。今の状況を今後のことをじっくり考える時間ができたと捉え、これからのビジョンをボランティアや障がいのある人たちと一緒に考えていきたいと思っています。

●中期計画スローガンをカタチにする

去る3月21日に新旧ボランティアが集まってボランティア交流会&勉強会が開かれました。これはコロナ禍でたまり場ぱれっと行事の延期が続く中、何とかして新しいボランティアをつないで行こうという想いのもとで開催されたものです。これより前には、12月、1月と続けてオンラインでも交流会を開き、クイズ大会などを挟みながらお互いの親睦を図ってきました。中期計画スローガンにもあるように、「知ろうあなたを みとめようありのままを つなげよう未来に」を形にしたものでした。以前のようにプログラムに追われていると、つい忘れてしまいがちなたまり場ぱれっとの良さ「いつでも参加できる、いつでも戻って来られるコミュニティ」を今一度しっかり見つめ直すことが出来たと思っています。この中であるボランティアから「人に会えるということを幸せに感じた」という声や、「たまり場ぱれっとの良さは年代、性別に一切偏りが無く、しかもそのギャップをあまり感じない」という感想をもらい、改めてたまり場ぱれっとは「誰でもいつでも参加できるコミュニティ」であると実感しました。



【ボランティア交流会の様子】

そして迎えた4月18日、昨年11月以来の「たまり場《はなれ》」を開催。新しいボランティアにとっては、初めて会う障がいのある人たち。とまどいも多かったようですが、終了後の感想では、「やっと皆さんに会うことが出来て嬉しい」と話した人がいました。

●そして5年先を見据えて

昨年来、世の中は「オンライン」が主流になっています。しかし障がいのある人たちにとっては、このツールは大変ハードルが高いものであると言わざるを得ません。スマートフォンやパソコンを持たない、操作もままならない人たちにとっては、たまり場ぱれっとは決して不要不急の余暇活動ではないと思いを強くしています。ただでさえ、通信機器の発達により、「言葉の会話」から「文字の会話」にコミュニケーションがシフトしてきています。また、「ちょっと嫌なことがあるとそれ以上の関わりを拒否してしまう」傾向も否めません。障がいのある人たちだけではなく、人と人が集まる場にはトラブルも起こります。しかし、それをしっかり向き合って乗り越えながら関係を作ることで、中期計画スローガンにある「泣いておこって笑って 助け合い一緒に歩む」ことができると考えます。このことは、たまり場ぱれっとに関わるすべての人たちで共有しながら歩んで行こうと思います。

反面、楽しいことを追求するがあまり、企画運営が大きな負担になることは避けなければなりません。5年先にも持続可能なたまり場運営を目指し、昨年、期せずしてゼロになった活動を、「元に戻す」のではなく、今の自分たちに出来ることをしっかり考えながら、再度構築していこうと思います。そこに中期計画スローガンの「楽しさを創り、人が集まる場所・ぱれっと」が生きてきます。自分たちだけで楽しむのではなく、常に新しい人たちとの出会いを意識しながらたまり場ぱれっとの楽しさを創る。そんな目標を立てています。

(事務局長 南山達郎)